

1) はじめに

一九八〇年代後半からひとつの運動として姿を現してきたホリスティック教育運動は、現代の教育が抱える様々な問題の根底に西洋近代文明が拠って立つ機械論的パラダイムがあることの反省に立ち、オールタナティブな教育思想、実践方法を提示してきた。このホリスティック教育運動は、ベトナム反戦運動やヒッピームーブメントをきっかけに一九六〇年代アメリカで大きな社会運動となったいわゆる対抗文化（カウンターカルチャー）の中で広まった様々な思想や実践と密接に結びついている。¹対抗文化の中で姿を現したそうした価値観や思想は、対抗文化が沈静化した七十年代以降も、いわゆるニューエージ運動として広く大衆の中で受け継がれていく一方で、メインストリーム文化の中にも徐々に浸透していった。一九八七年タイム誌がニューエージの特集を組んだのは、そうしたニューエージ運動がマージナルなサブカルチャーから脱し、メインストリーム文化の大きな部分として位置づけられるようになったことをはっきりと示すエポックメイキングな出来事であった。

サブカルチャーとして位置づけられてきたニューエージ運動がメインストリームに大きな影響を与えた典型的な例が、ホリスティックヘルス運動から代替・相補医療（Complementary and Alternative Medicine）、そして統合医療(Integrative Medicine)へと展開されつつある医療面での変革である。精神と分離した肉体の構造を解剖によって明らかにし、その機能を機械的なメタファーで説明する近代医学は、治療という面では十九世紀末の細菌病原説によって大きな発展を遂げたが、その還元主義的手法には生命ある人間を全体として捉える視点がかけていた。そうした西洋近代医学への批判から、七十年代に入って人間を身体、心、精神の全体的存在として捉え、全体としての人間の癒しを目指すホリスティック医学運動が生まれた。西洋近代の医療システムの問題点への反省に立ったこの運動の実践者たちは、それに代わる癒しの技法として、カイロプラクティックやホメオパシー、針治療や気功、アユルベーダなどそれまで非科学的として排除されてきた非西洋的伝統医療に目を向けた。こうした非伝統的医療は、七十年代から八十年代を通じてニューエージ運動に関わる人々の間からより多くの人々の間へと浸透していった。

その結果、一九九三年にアメリカの医学誌として最も権威のある「The New England Journal of Medicine」誌に発表されたレポートで明らかになったように、全米で過去三年間にリラクゼーション、針治療、カイロプラクティック、マッサージ、スピリチュアル・ヒーリングなどの民間医療（Unconventional Medicine）を受けた人は、全体の三分の一を占め、しかもそうした治療の総数は通常の医療を受けた数を上回るまでになった。またこの調査では、こうした民間医療に使われた医療費はアメリカの総人口に換算すると百三十七億ドルにもものぼり、全米の全ての病院で自費で支払われる医療費の総額とほとんど同じ額であることも判明したのである。

こうした民間医療の広がりやアメリカ医学界に大きな衝撃を与え、一九九〇年代以降多くの医学校で民間医療についての知識を教えるカリキュラムが生まれ、付属の代替・相補医療センターが設立されるようになった。またアメリカの医療研究の牙城であるNIH（国立保健研究所）でも、こ

れまで非科学的として無視されてきたそうした民間医療に関する研究にも助成がおこなわれるようになり、その結果一九九七年には全米医学界が針治療の有効性を公式に認める声明を発表するに至ったのである。代替・相補医療と総称されるようになった民間医療の受け入れ流れは、その後の追跡調査でも確認され、二十一世紀に入り西洋医学とそれ以外の様々な癒しの技法を共存させる統合医療として、アメリカだけでなく世界の医療のあり方を大きく変革させる流れとなっている。

こうした民間医療が七十年代以降サブカルチャーとしての立場から、メインストリームの医療に変革を迫る大きな力にまでなったのは、癌やエイズといった難病ともに腰痛やリウマチといった慢性の痛みに対して西洋近代医学がほとんど無力であったことが原因と考えられている。しかし一方では、六十年代の対抗文化の中で見いだされニューエージ運動の中で受け継がれてきたこれらの癒しの技法の多くが、まったく新しいものではなく、実は長い歴史の中で育まれてきたものであり広く一般民衆の間で受け入れられる土壌があったからだと考えられる。

ニューエージ運動やその発端とされる対抗文化は、しばしば六十年代のアメリカ（特にカリフォルニア）で突如わき起こったものと考えられている。しかし、対抗文化で見いだされた価値観や実践法がこの三十年の間にアメリカ社会で広く受け入れられるようになったのは、それらが十九世紀のアメリカ、あるいはもっと古くルネッサンスのヨーロッパ以来民衆の間で育まれてきた土壌があったからだと考えられる。本稿では、こうした対抗文化とそれに続くニューエージ運動によって生み出されてきた価値観、実践方法の源流となったものの足跡を辿りながらニューエージ運動の特徴を明らかにし、欧米とは異なる歴史的、文化的背景すなわち民衆の土壌をもつ日本で二十一世紀のホリスティック教育がどのような方向に進むかを考える一つの問題提起を試みたい。

2) ニューエージ運動の特徴 :

日本にも七十年代後半から「精神世界」というコーナーが大書店にできるようになり、UFOやオカルト関連の本から、ヨガや仏教関係の本、それに心理療法や物理学についての本までが雑多に並べられていた。また八十年代には、ジョージ・ウインストンや喜太郎に代表されるニューエージ音楽がロックやジャズ、□ □ クラシックとならんでレコード店で一つのジャンルとしてコーナーを持つようにもなった。こうしたものに加え、九十年代に入るとクリスタルやハーブなどの「何となく気持ちよくなる」グッズ、「本当の自分探しの旅にでる」といったフレーズに代表されるセラピーや自己発見セミナー、サイ・ババやダライ・ラマといったスピリチュアルな指導者、死後の世界や臨死体験などがマスコミをにぎわすようになり、またポジティブ思考を唱える「脳内革命」が大ベストセラーになった。この多様なニューエージ運動を一言で表すなら、「変容への希望を掲げた運動」といえる。ニューエージ運動に関わる人々には、西洋文明の発達に伴い人間性や地球全体に対する深刻な危機が生まれているという認識、その危機に対して人間の意識が根本的に変わらなければならないし、変わりうるのだという共通の希望がある。ただその変容に関しても、ある人々は意識あるいは心の内面（たとえば恐怖心や怒りなど）を変容させることの大切さを説き、またある人は環境問題や人種問題、食糧問題などの社会問題に直接関わることが不可欠だと考える。またなかには金星人など地球外からのコントロールや宇宙の進化的必然性との関連からこうした危機をとらえることの必要性を説いたりする人もいる。このように同じような危機の認識と意識の変容へ

の希望をもつニューエージ運動も、そのコンテクストの違いや、何を強調するかにおいて様々な違いがある。たとえばトランスパーソナル心理学とその先行者である人間性心理学は、科学主義に基づく主流派の行動主義心理学やフロイト派の精神分析によって心理学の対象から失われてきた健康な人間性や人間の自己超越性を回復する運動として成立してきた。またホーリスティック医学は、機械のメタファーを使った身体観に基づく分析的、還元主義的医学で失われてしまった人間の全体性を回復すること、ニューサイエンスにおいては宗教と科学の融和、チャネリングやオカルト神秘主義においては非理性的体験あるいは聖性の直接体験が強調されている。こうした比較的大きな流れを作り出している運動の他にも、ニューエージと呼ばれる中には、時代の流れに対し何だか「新しい」というイメージにまつわるあらゆるものが流れこんでいるのも事実である。

こうした事態に対し六十年代にニューエージ運動の走りとして注目を浴びたスコットランドの共同体「フィンドホーン」でチャネラーとして活躍したデビッド・スピングラーは、ニューエージ運動を四つのレベルに分けてとらえることを主張している。²

1. 商業主義の産物としての表層的なレベル。たとえばニューエージ・レストランとかニューエージ歯磨き粉とかいった商品のラベルに使われるようなもの。
2. メディアが扱うポップカルチャーとしてのレベル。これはたとえば、東洋の神秘的なグルとか惑星外からの訪問者、サイキックパワーといったポップオカルティズムがごたまぜになったもの。こうした現象は時代のあだ花として一過的なものと考えられているが、ニューエージ運動の研究者は広い意味でニューエージ運動と呼ばれるもののすべてがこうした現象と同一視されることに反対している。
3. ニューエージの様々な現象を「パラダイムシフト」として関連づけ、ニューエージ運動を「変化のシンボル」ととらえるレベル。このレベルでニューエージ運動を捉えている人々は、グレゴリー・ベイトソンやバックミンスター・フラワーなどの理論を中心に据えて現代文明の置かれている様々な価値観を根底から変容させることを目指している。
4. この地上の生命を再び「聖なるもの」につなげる運動としてニューエージ運動をとらえるレベル。このレベルではニューエージ運動を根本的にスピリチュアルなレベルでの変容を求める運動として捉えている。

このスピングラーが分類したニューエージ運動の四つのレベルは、どのレベルがより「本物」のニューエージであるかというものではないが、ニューエージ運動にもっとも長く関わっている一人であるスピングラーが「聖なるものの再生」を重視しているのは大切なポイントである。つまり、ルネッサンス以降の自然科学の発達によって影へとおいやられてきた「聖なる体験」を回復する運動、それがニューエージ運動であるとスピングラーは考えているのだ。

またオランダの宗教学者ヘングラフは「New Age Religion and Western Culture」という本の中で、西洋文化におけるこの「聖なる体験」の回復を求めるニューエージ運動を「世俗化された秘教主義の観点から表現された民衆によるメインストリーム文化に対する批判」と位置づけ次のように述べている。

「すべてのニューエージの宗教は、現代西洋文化の二元論的で還元主義的な傾向に対する批判という特徴をもっている。教条主義的キリスト教と理性偏重かつ科学主義的なイデオロギーに

代表されるこうした傾向に対し、ニューエージに関わる人々は、宗教とスピリチュアリティか科学と理性かといった二者択一ではない第三の道があると信じている。そしてこれまで西洋文化を支配してきた二つの流れ（教条主義的キリスト教と、同じくドグマティックで理性偏重的である科学主義的なイデオロギー）こそ現在世界を襲っている危機をもたらした責任があり、この第三の道が社会で主流になることだけがそうした危機を解決しようと主張している。」³

ニューエージ運動の中に含まれる様々な世界観や「癒し」の技法は、それがクリスタルやチャネリングによるものであれ、またサイコセラピーやボディワークであれ、この西洋近代文化のあり方に対する根本的な問い直しという大きなコンテクストの中で理解されることが大切である。そうした視点から多様なニューエージ運動を捉え、その一般的な特徴をあげてみると、

1. 地球環境や核の問題への強い危機感を抱いている。
2. 癒しを強調する。
3. 現代的であることを好み科学的な用語を使う。
4. 東洋の諸宗教や西洋の神秘主義など様々な伝統を混淆する。
5. 一元論的で非人格的な存在論を基盤にする。
6. 楽観主義で成功を強調する。
7. 進化論的見方を採用している。
8. 物質にも精神にも還元できない力を強調する。

といった点があげられる。もちろんニューエージ運動と呼ばれる様々な流れがそれぞれこうした特徴をすべて備えているわけではない。またこうした特徴の一部を共有するだけで、そのために一見すると（例えば1と6のように）互いに矛盾しあう要素をもっているものもある。またこうした特徴を共有し西洋文化を批判しながら、その当の西洋文化の還元主義や二元論に陥っているものも数多くある。しかし、いずれにしろこうした特徴と変容への希望を掲げたニューエージ運動は、先程述べたように、一九九〇年代に入りもはやたんなるサブカルチャーではなくメインストリームの文化運動として、アメリカ社会を動かす大きな力となってきている。

3) ニューエージ運動の源流

こうしたニューエージ運動はどのような歴史的背景から生まれてきたのだろうか。その鍵となるのが、西洋社会における「聖なるものの」の喪失の問題である。わたしたちにとって日常の仕事や学校、家庭での生活は生きていく基本的な要素であるが、そうした日常生活の狭間でふと、「なぜ自分は生きているのだろうか」「生きている意味とは何なのか」という疑問がわき起こってくることもある。そうした疑問に対し日常生活から答えが返ってこないとき、わたしたちは宗教の世界に惹かれていく。多くの人にとって、日常世界を越えた「聖なる世界」、あるいはスピリチュアルな世界をありありと体験することが、生きていく意味や世界のありように対する答えを獲得する手がかりだった。宗教学者のルドルフ・オットーが主張しているように、そうした「聖の実在感」こそが実は宗教の本質であった。ところがキリスト教やユダヤ教、仏教、ヒンズー教と大きな宗教が発達する中で、そうした「聖の実在感」よりもある特定の教団組織の維持や教えの正当性の主張が宗教活動の眼目としてとって代わられていった。「聖なるもの」の実在感を求めるものとそうした正当

性を重視する宗教組織の葛藤は、人類の長い歴史の中で多かれ少なかれたいていの宗教においてみられる問題だった。

キリスト教会が支配する中世ヨーロッパ社会においてもこうした葛藤はみられた。中でも、14世紀になってキリスト教神学にアリストテレスの世界観が導入されると、それまで私たちの感覚するこの現実世界とより高次な神の世界を結びつけてきた「天使の領域」が否定され、神の領域と物質的な自然界の結びつきがキリスト教の神学から失われてしまった。「天使の領域」というのは、夢やイメージとして体験される「聖なる」世界であり、神秘主義者達は様々なアレゴリーを使って「聖なる体験」を表現してきた。ところが、アリストテレス的スコラ哲学によって、そうしたイメージの体験によって「聖なる世界」につながる道が完全に否定されてしまい、教会組織を通してのみ「聖なる領域」につながる事ができる、とされてしまったのである。

この失われてしまった個人と「聖なる世界」との結びつきを求めて秘教主義が次第に一般民衆の間に広がっていった。そもそもそうした秘教主義は、ギリシア時代のピタゴラス学派、グノーシズム、ネオプラトニズム、ヘルメス学とヨーロッパの歴史のなかで連綿と伝えられてきたものであった。十八世紀の啓蒙主義以前は、神の創造したこの自然の神秘を明らかにするために、自然科学の探求とともにそうしたヘルメス学やネオプラトニズムの哲学を受け継ぎ、錬金術や魔術、占星術を実践していた科学者は大勢いた。ところが、自然科学の方法と理性だけを唯一の信頼できる知識の源泉とする啓蒙主義は、非理性的な信仰や聖典の解釈を認めず、理性によっては計り知ることのできない現象や直感的な理解に関わるような探求を排除してしまった。その結果、科学は錬金術や魔術とはまったく別物であるという今日のような見方が定着してしまったのである。しかし西洋近代科学の歴史をたどってみると、自然科学と魔術がはっきり区別されるようになったのは自然科学の成果と理性への信頼が揺るぎないものとなった十八世紀の啓蒙主義以降のことであり、それまでの数世紀に渡り、自然科学者がまた秘教主義の伝統を受け継ぐ神の探求者でもあることは珍しくなかった。

アリストテレス的スコラ哲学の導入は、教会による「聖なる世界」の独占を生み出したが、その一方で自然界の独自の法則を研究するという自然科学の発達を生み出すことにもなった。ルネッサンスに入ると、この自然科学は教会の権威から独立して独自の発展を遂げ、啓蒙主義時代になりその理性の光によって教会の権威に対する攻撃を強めることになった。この啓蒙主義の光はフランス革命へとつながる民衆の解放をもたらしたが、それはまた「聖なる世界」への道を保ってきた秘教主義の伝統をも危機に陥れることになった。そこでキリスト教秘教主義は、自らの正当性を保証するために、逆に自然科学を取り入れ世俗化していく道を選んでいった。この「啓蒙主義によるキリスト教秘教主義の世俗化」の結果生まれたのが、今日オカルティズムと呼ばれるものの源流と考えられる。つまり、個人が「聖なる体験」につながる道を探求する秘教主義が、アリストテレス的スコラ哲学に支配されたキリスト教の主流派によってヨーロッパ社会の非主流派へと放逐され、それが啓蒙主義時代に入り自然科学との共存を図って世俗化して生まれてきたものがオカルト運動なのだ。だからハネグラーフがいうように、オカルトというのは「脱魔術化した世界に溶け込もうとする神秘主義者の努力、あるいは脱魔術化した世俗化世界の観点から神秘主義を意味づけようとする人々の試み」であり、「聖なる世界」の探求を自然科学と同居させることで教会主導の正当キリ

スト教に対抗するために生まれてきたものなのだ。二十世紀後半のニューエージ運動、特にニューサイエンスと呼ばれる流れの中で強調される宗教と科学の調和というのは、二十世紀に入って突然言われ出したものではなく、このようなキリスト教会に対抗するため世俗化していった神秘主義の流れに位置するものだと理解していくことがとても重要である。

十八世紀のヨーロッパで起こった秘教主義からオカルティズムの誕生に大きな役割を担い、ひいては現代のニューエージ運動につながる癒しの伝統を産み出した二人の人物がいる。スウェーデンの科学者であり神秘主義思想家であったエマニュエル・スウェーデンボルグ（1688-1772）とオーストリアの医師フランツ・アントン・メスマー（1734-1815）である。この二人によってそれまで限られた人々の間でしか実践されてこなかったキリスト教秘教主義が、十八世紀以降西洋近代科学の衣をかぶることでより広範な大衆の間に広まっていったのである。

一六八八年スウェーデンに生まれたイマニュエル・スウェーデンボルグは、スウェーデンの鉱山局に籍を置きニュートンの物理学から数学、生理学、解剖学まで広範な自然科学を学ぶ科学者だった。ところが晩年の五十五才になり、スウェーデンボルグは突然天使と対話し天界と地獄を旅する神秘体験をし、それ以来自然科学者から霊魂の本質を探る神秘思想家へと大きく変わったのである。「天界と地獄」など神とこの世界にあり方についての著作をいくつも著し「聖なる」世界の扉を開いたスウェーデンボルグの神秘思想の中心にあるのは、「照応」（correspondences）という概念だった。

彼は「高次の精霊界」こそが生ける領域つまり真の世界であり、私たちが普段意識しているこの「物質世界」あるいは自然界はその鏡に過ぎない死せる領域であると主張した。そしてこの両方の世界の間には因果的な結びつきはなく、ただ照応のみがあると考えた。たとえば、精霊界の太陽と自然界の太陽について、スウェーデンボルグはこう述べている。

「（神の）創造そのものは決して自然界の太陽に関わるものではなく、ただ精霊界の太陽にのみ関わるものである。なぜなら自然界の太陽はまったくもって死せるものであり、精霊界の太陽こそが生けるものであり、神の愛と神の知恵から最初に生み出されたものだからである。そして死せるものはそれ自身から動くものではなく、ただ動かされるものである。」スウェーデンボルグは、人間はこの二つの領域の双方に関わるものであり、だからこそ神に接しうる存在であると考えた。つまり「自然界はどこからどこまでも精霊界から出ているものであるから、両者には対応が必ず存在する。つまり人間は魂のかたちで精霊界を内に持ち、同時に肉体という形で自然界を外に持っている。しかも人間は心の働き――意志と思考とによって身体を動かす。これがすなわち、人間の中に具現している照応の事例なのである。」⁴

スウェーデンボルグの神秘主義の核心は、「全ての人間は自然界と精霊界に同時に存在していることに気づかず、我々はどちらか一つしか意識していない」普通の状態を改め、照応の事実を再確認することにあつた。そして彼は「死は一つの世界から別の世界、あるいは一つの意識から別の意識へと通じる扉である。死の前には我々はこの世界で意識をもち、精霊界の意識は無意識のまま内に閉ざされている。死後は、精霊界で意識をもち一方この世界とのつながりは無意識のまま保たれる」と考え、死後の世界との接触によってスピリチュアルな学びを得ることができることを示したのである。

死後の世界との接触を説くスウェーデンボルグの思想は、十八世紀以降のオカルティズムに大きな影響を与えることになるが、彼が唱えた「生ける精霊界」と「死せる自然界」という自然観は、神の恩寵が世界の隅々にまで行き渡っているというそれまでの秘教主義の自然観と大きく異なるものであった。それまでの秘教主義では、自然は神の創り賜うた世界であり、自然の隅々にまで「聖なる」ものが行き渡っていると考えられていたのに対し、スウェーデンボルグの思想はデカルト的精神と物質の二元論を採り入れ、物質としての自然界と精神としての精霊界を明確に区別したものであった。スウェーデンボルグ自身は、この照応の哲学により秘教主義と科学の融和を図ったのだが、彼の思想はそれ以降のオカルティズムにおける科学的自然観と神秘主義的世界観の融合の前例を作ると同時に、「自然界や肉体」に対する「精霊界や精神」優位の流れを生み出すことにもなった。

スウェーデンボルグと共に十八世紀以降の神秘主義の世俗化に大きな影響をもったのが、「動物磁気」による治療を唱えたオーストリア生まれの医師フランツ・アントン・メスマーであった。メスマーは磁石を使った治療を通して、それまでの科学で捉えられていなかった物質と精神を結びつける役を果たす目に見えない不可思議な力を発見し、それを「動物磁気」と呼んだ。そしてあらゆる病気はこの「動物磁気」が平衡を失っているためであると考えたメスマーは、患者の神経に「動物磁気」をチャージすることによって患者を治療していった。メスマーの治療法の実際のやり方は、患者を今でいう催眠状態に入らせて無意識の治療をするものだった。（英語で催眠という言葉はメスメリズムと言いが、メスマーこそこの言葉の語源になった人である）ヨーロッパにおける無意識の療しの歴史を研究したアンリ・エレンベルガーは、このメスメリズムの治療の原理を次の四点にまとめている。¹⁵

(1) 宇宙を満たしている、精妙な物質的流体が人間と地球、天体の間あるいは人間と人間の間を媒介する。

(2) 病気とは人体にあるこの流体のバランスが崩れることから生じる。病気から回復するにはこのバランスを取り戻すことが大事である。

(3) あるきまった技術を用いることでこの流体の流れができ、貯蔵したり他の人に移すことができる。

(4) このようにして「危機」が患者の中に喚起され、病気が治る。

こうした原理の一つ一つは新しいものではなく、メスマー以前にも未知の力で病気を治療する治療師たちは他にもいたが、彼らがその力を悪魔や神の力だと説明したのに対し、啓蒙主義時代の科学者であるメスマーは、その力を「動物磁気」という自然科学の対象となる未知のエネルギーだと主張したことで、より大勢の人々に受け入れられていった。メスマー自身は治療師としての彼の名声を妬んだ医師たちから迫害を受け、晩年を不遇のうちに過ごすことになったが、その後も彼の開発した治療法はフランスやオーストリアを中心に受け継がれていった。

「動物磁気」は当時の物理学で受け入れられていたエーテルや電気のように物質的基礎をもつものであるという彼の考えは、その後さまざまな変遷を遂げることになる。その一つの流れはエレンベルガーが言うように催眠治療法として十九世紀のヨーロッパの癒しの伝統に大きな流れを生み

だし、ひいてはフロイトの精神分析の誕生をもたらすことになった。またメスマーの「動物磁気」は西洋の秘教主義で唱えられてきた「宇宙のすべての部分をつなぎ人間の健康や調和のとれた世界への鍵となる目に見えない微細な実体」とも同一視され、実践面からの秘教主義の大衆化に大きく貢献することになった。特にメスマーの治療法でトランス状態に陥った患者の多くが一種の霊媒となって様々な体験を語ったが、そうした物語を理解するのにスウェーデンボルグの描いた「もう一つの世界」は格好の理論的枠組みを提供した。

4) スウェーデンボルグとメスマーのアメリカでの発展

十八世紀のヨーロッパで流行したスウェーデンボルグの思想とメスマーの動物磁気による治療法は、十九世紀始め海を渡って新世界のアメリカにも伝わってきた。十九世紀のアメリカは、西部開拓とゴールドラッシュ、大陸横断鉄道や電信網の整備、それに工業の発展といっためざましい社会の変化に伴い、人々の生活が大きく変わった時代だった。既成のキリスト教会も、また心身二元論に基づく機械論的身体観に根ざした近代医学も、新たな社会変動によってもたらされた精神的ストレスを癒したいという人々の欲求を満たすことはできなかった。特に急速な都市化によってもたらされた変動に、それまでのプロテスタント教会はほとんどなすすべがなく、人々は既成の教会を離れた精神運動に大きな関心を寄せることになった。そうした時代状況のもとで、様々なキリスト教の分派やヨーロッパのオカルト神秘主義、それにヒンズー教や儒教などの東洋宗教の教えが混じりあって、トランセンデンタリズム、スピリチュアリズム、ニューソート、神智学といった新たな精神運動が起こってきたのである。

そうした新しい精神運動の中でもラルフ・ウォールド・エマーソン（1803-1882）を中心にしたトランセンデンタリズム（超絶主義）は、物質に対する精神の優位を説きながら、その当時人々にしだいに浸透してきたアメリカ独自の価値観である個人主義や進歩への信仰と東洋の理念的形而上学を結びつけ、十九世紀半ばから大きな影響をもつようになった。ボストンに拠点をおいたトランセンデンタリストたちは、伝統的キリスト教に縛られることなく、バガバッド・ギータ、ウパニシャッド、マヌの法典といったヒンズー教の聖典や仏教などの影響を受けながら、新しいアメリカの宗教を模索していた。彼らは「森の生活ーウオールデン」で有名なソローのように、自然に目を向けることで内なる自己の神秘と神の作り賜うた教えを学ぶことができると信じていた。いかなる形での啓示よりも、神や真理を直接に知ることを重視したという点で人間であることを肯定的に捉えるこのトランセンデンタリズムは、教会などの伝統的なキリスト教の組織や教えにとらわれず東洋の宗教に目を向けそのエッセンスを知的に理解しようとするその後のニューエージ運動の先駆けとなった。

トランセンデンタリズムとともに現在のニューエージに大きな影響を与えた十九世紀アメリカの精神運動に、スピリチュアリズム（心霊主義）がある。一八四八年フォックス姉妹が霊との交流の方法を発見し、それが新聞や雑誌などの新しいメディアを通して報道されると、霊との交流はたちまちのうちにアメリカ人の注目を集めることになった。特に南北戦争後、戦死した家族と話したいという人々の欲求と合致しこのスピリチュアリズムは大流行していった。十九世紀のアメリカでは実証主義科学の発展や物質文明の発達によって、天国や死後の魂の存在は問題にされなくなり、

人々のキリスト教信仰は大きく揺さぶられていた。そうした中で死者との交流によって死後の世界の存在を「実証」できるスピリチュアリズムは、物質文明の中で新たな精神世界の枠組みを提示しキリスト教的倫理の基盤を提供する役割も果たした。スピリチュアリズムによる霊との交流の大きな特徴は、教会や神父といった神の仲介者の存在なしに、普通の市民が経験によって裏付けられた方法によって死後の魂の存在を確認できることにあった。それまで教会が独占していた霊的世界が、誰でも実際に体験できる「科学」の対象として人々に提供されることになったのである。トランセンデンタリストたちがエリート精神運動であったのに対し、スピリチュアリズムは実際に誰でもが霊と交流できる実践的な方法であり、スウェーデンボルグの思想とメスマーの動物磁気治療法がヨーロッパで広げた世俗化された秘教主義をアメリカの一般大衆に広める役割を果たした。

十九世紀後半のアメリカでスピリチュアルな癒しを唱えた運動の中でもうひとつ大切なものが、十九世紀後半のニューイングランドを中心にキリスト教の教派運動として盛んになった「ニューソート」（新思考）運動である。一八三〇年代後半にフランスから入ってきたメスメリズムの治療家であったフィニス・キンブリーは、メスメル唱えた「動物磁気」の理論に疑問を覚え、患者の病気に関わるのは「動物磁気」ではなくその人の信念と期待であると考えた。個人の心の内面を通して癒しの根源である宇宙の高次の精神的エネルギーに触れることができるという彼の形而上学は、エンマ・カーチス・ホプキンスという女性によって心の癒しを強調する「ニューソート」運動として広がり、そこから多くのキリスト教の教派が誕生していった。たとえば良い仕事に就きたければ一生懸命それを願えば必ず実現する、というこのニューソートの教えは、急速な都市化と工業化で精神的ストレスが増大している人々に対し、有効な対処法を示せない近代医学や既成のキリスト教会を押し分け、急速な勢いで広まっていった。心のあり方をコントロールすることによって自分の無意識の奥深くに触れることができ、考え方次第で心身の健康を回復し物質的世界にも変化をもたらすことができるというこのニューソート運動の教えは、現代の「ポジティブ思考」の源流としてニューエイジ運動の基礎を作ったのである。

一九六〇年代以降のニューエイジ運動の大きな特徴の一つにヒンズー教や仏教の影響があげられるが、トランセンデンタリズムを介してもたらされた東洋の諸宗教に対する関心をさらに深め、アメリカにおけるオカルト主義の基礎を築いたのがブラバッキー夫人（1821-1891）らによる神智学運動だった。ロシアに生まれ世界遍歴の間にスピリチュアリズムと出会ったブラバッキー夫人は、一八七五年アメリカに渡りオルコット大佐と共にスピリチュアリズムのサークルを結成した。しかし、霊が物質的な作用を及ぼすことにのみ関心を抱くスピリチュアリズムの方向性に対し、新たな秘教主義の教えの必要性を実感した二人は、ヒンズー教の教えと西洋秘教主義の伝統を織り混ぜた神智学協会を設立したのである。初めニューヨークを拠点に活動していた神智学協会は、数年後インドに本拠を移しヒンズー教の影響をさらに色濃くした。ブラバッキー夫人がその後のニューエイジ運動にもたらした影響の中で最も大きなものが、カルマと輪廻の思想だった。インドでは行為と形而上学的な因果応報を表す原理だったカルマの思想を、ブラバッキー夫人は西洋のスピリチュアルな成長の概念と結びつけ、人間の霊的な成長が死後も続くという新たな意味付けを与えたのである。彼女のもたらした新しいカルマの概念は、そのヒンズー教や仏教の装いにも関わらず、決定づけられた運命ではなく個人の自律性と責任を確保し精神的な進歩を説明するという意味で、西洋の

オカルト的伝統の進歩史観に乗っ取ったものだった。ブラバッキー夫人は一八九一年に亡くなり、彼女の死後神智学協会は分裂を繰り返すが、そのなかからジッド・クリシュナムルティやルドルフ・シュタイナーらが出て独自の教えを展開し、今日のニューエージ運動に大きな影響を与えている。

十九世紀アメリカにおけるスウェーデンボルグとメスマーの影響は、トランセンデンタリズム、ニューソート、神智学などの形而上学的な運動だけでなく、新しい身体の癒しの誕生にも及んだ。その代表的なものがオステオパシー、トンプソニアン、クリスティアン・サイエンス、カイロプラクティック、ホメオパシーなどである。例えばカイロプラクティックはメスマーの「動物磁気」療法の治療家であったD. D. パーマー（1845-1913）が始めたハンド・オン・ヒーリングつまり徒手療法的一种である。ある耳の聞こえない患者の治療を行っていたパーマーが、患者をうつぶせに横たえ背骨に沿って手を動かしてみると、脊椎骨の一つが異常に隆起しているのに気づいた。その隆起を手で押してみると、骨が動いて元の正常な位置に戻り、患者は突然耳が聞こえるようになったのである。この発見の後パーマーは、ずっと回復の兆しのない心臓疾患の患者にも同じような治療を試みた。「私が背骨を調べると脊椎骨の一つがずれて心臓の調節につながっている神経を圧迫しているのに気づいた。その脊椎骨を調節すると、患者はすぐさまよくなった」と後に書いているように、背骨を手で押して元の正しい位置に戻し身体中の生命エネルギーの流れを回復することで癒しが起こると考えた彼は、この新しい癒しの技法をギリシア語で「手」を意味する *cheiro* と「行う」を意味する *praktos* を合わせてカイロプラクティックと名付けたのである。秘教主義やスピリチュアリズムにも通じていたD. D. パーマーは、神聖なエネルギーが人間の身体特に脳と神経を介して流れると考え、カイロプラクティックで背骨の調節をすることでこの生命エネルギーがバランスよく流れるようになり、身体の健康と知性の発達が得られると考えた。「宇宙は完璧に調和の取れた状態にあり、わたしたちの生命も本来この調和の取れた状態にある。ところが背骨と神経の歪みによってこの生命の表出が妨げられる。カイロプラクティックの治療は、この歪みを調べ矯正することで有機体が自由な発達を遂げその自然の潜在能力を十分に発揮できるようにすることにある。」と述べているように、D・D・パーマーの開発したカイロプラクティックは独自の治療技法とスピリチュアルな哲学をもつものであった。カイロプラクティックは、彼の息子B.J.パーマーによって組織的な癒しの技法として確立され、専門の教育機関も設立され十九世紀末のアメリカ社会に急速に普及していった。

またこうした十九世紀アメリカで新しく生まれた癒しの技法の他にも、ヨーロッパからの移民たちがもたらした民間医療も数多くあった。その代表的なものが、ホメオパシーである。十九世紀前半ドイツ人サミュエル・ハーネマン（1755-1843）が生み出したホメオパシーは、「病気とは症状そのものであり健康な人間に同じ症状を引き起こす薬をできるだけ少量投与することによってその病気を治療できる」という独自の癒しの哲学をもち、一八三五年にアメリカで最初のホメオパシーの医学校が設立されると、過剰な投薬に頼る当時の医学に対する批判を展開しながら大きな勢力となっていった。十九世紀末には、当時のアメリカの医学校全体の十五%にあたる二十二のホメオパシー専門の医学校が設立され、多くのホメオパシーの治療家を育成していた。

しかし、十九世紀のアメリカで民衆の間で広まっていたこれらの治療法は、二十世紀に入ると西洋近代医学との対決に晒され、その影響力を急速に失ってしまった。コッホやパスツールによる細菌学説が確立される以前の十九世紀後半のアメリカ社会では、西洋医学を学んだ医者は、その絶対数の不足も相まって影響力はさほどのものではなかった。むしろカイロプラクティックや、独自の療しの哲学をもつホメオパシーなどが一般の人々の頼りにされていたのである。こうした事態に危機感を抱いた医師たちは、アメリカ医学会を創設し、その政治的活動を通してホメオパシーやカイロプラクティックといった当時民間に広まっていた療しの技術を病院などの公的治療の場から閉め出していったのである。一九一〇年に提出された医学教育に関するフレクスナー報告によってホメオパシーはその専門的権威を否定されそれ以降アメリカ社会の中ではほとんど姿を消してしまい、カイロプラクティックは医学と共存していくために、D. D. パーマーのスピリチュアルな治療哲学を捨て、近代医学の身体観と矛盾しない生理学的な治療法として生き残っていくことになる。こうした療しの技法が再びその独自の哲学と共に復活してくるのは、一九七〇年代に入ってホーリスティック医学が脚光を浴びるようになってからであった。

5) 第二次大戦によるヨーロッパからの影響と人間性心理学の誕生

南北戦争の痛手を乗り越え急速な工業化を進めていた二十世紀前半のアメリカでは、勃興する資本主義の価値観に沿った新たな社会的権威の確立が進んでいた。一方同じ時期のヨーロッパでは、一九世紀の近代化のひずみに対する反省から、特にドイツとオーストリアを中心に新たな癒しの運動が生まれていた。ウイーンではメスマーの「動物磁気」療法にルーツをもつ催眠療法をフランスで学んだジークムント・フロイド(1865-1939)が、一八九〇年代に独自の神経症論とその治療法としての精神分析を創設し、二十世紀の心の癒しに画期的な一ページを飾った。フロイトの精神分析は、アルフレッド・アドラー、カール・ユング、オットー・ランク、ウイヘルム・ライヒといった弟子たちによってそれぞれ独自の癒しの技法へと発展され、それらは六十年代カリフォルニアを中心に盛んになった対抗文化やニューエイジ運動へとつながっていった。またベルリンでは、二十世紀に入り女性を中心に新しいギムナスティック運動が盛んになった。男性向けの機械的なモデルに基づくそれまでのギムナスティック運動に対し、呼吸や運動感覚を重視し自らの身体への気づきを深めることを目的としていたこの運動の中心にいたのがエルサ・ギンドラー(1885-1961)である。西洋医学に見放された結核を自ら治す体験を通して、身体への気づき、呼吸の重要性に気づいたギンドラーは、自らの教えをArbeit am Menschen(全人間のためのワーク)と呼び身体についての感覚を深める新しい実験を重ねていき、現在の呼吸や身体感覚に注目する多くの癒しの技法の源流となった。彼女の生徒には、後にアメリカに渡りギンドラーの教えをセンソリーアウエアネスとしてアメリカに伝えたシャーロット・セルバーや、若き精神分析家ウイリヘルム・ライヒの妻、ゲシュタルト療法の創始者の一人ローラ・パールズなどがいた。この他フランクフルトではマルティン・ブーバーやポール・ティリッヒを中心に実存主義に基づくキリスト教・ユダヤ教神学の再解釈が行われ、また実験心理学の分野でもクルト・コフカ、ウオルフガング・ケラー、マックス・ヴェルトハイマー、クルト・ゴールドシュタインらが、それまでの要素還元主義的な知覚理論に代わるゲシュタルト心理学を創設した。

二十世紀初頭のヨーロッパでこうしたヨーロッパ近代への見直しの活動に関わった人々の多くがユダヤ人であったため、一九三〇年代ナチスが台頭すると共に彼らの多くがその迫害を恐れアメリカに移住し、その活動の舞台をアメリカに移していった。そうした移民の中には精神分析家のカレン・ホーネイ、エリッヒ・フロム、ウイリヘルム・ライヒ（当時すでに独自のオルゴン療法を開発していた）、ゲシュタルト心理学のマックス・ヴェルトハイマー、クルト・コフカ、ゲシュタルト療法の創始者フリッツ・パールズ夫妻、実存主義神学のポール・テリッヒ、一般意味論のアルフレッド・コージブスキー、センソリー・アウエアネスのシャーロット・セルバーなどがいた。かれらの多くはニューヨークのニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチなどを中心に新たな交流を始め、その「知的るつぼ」の影響を受けながらエイブラハム・マズローやフリッツ・パールズ、カール・ロジャース、ロロ・メイらが独自の心理学を生み出したのである。マズローの呼びかけによって、そうした新たな流れは人間性心理学として結実し、行動主義、精神分析と並ぶ心理学の一大潮流となった。この潮流はたんに心理学の変革に留まらず、六十年代以降、医療、教育、スピリチュアリティ、社会運動など様々な分野においてアメリカ社会の価値観に大きな影響を与えてきた。すなわち、二十世紀に入ってヨーロッパから流れ込んできた近代への反省についての知的な波とそこから生まれた「新たな」価値観や実践を、アメリカの民衆が受け継いできた土壌に移植する大きな役割を果たしたのがこの人間性心理学であると言える。⁶

1960年代：エサレン研究所とヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント

第二次世界大戦後の資本主義陣営をリードし物質文明の繁栄の絶頂にあったアメリカは、60年代に入り若きジョン・F・ケネディが大統領に選出され、新たな時代の幕開けを感じさせた。そうした時代の雰囲気の中で、新たなヴィジョンを予見したのが、「恋愛対位法」で作家としての地位を確立し第二次大戦後南カリフォルニアに移り住んでいたイギリス人、オルダス・ハックスレーであった。「素晴らしき新世界」などその知性と持ち前の好奇心で人間性に対する深い探求と思索を重ねていたハックスレーは、1960年カリフォルニア大学サンフランシスコ校で行った「人間の潜在的な能力」と題する講演の中で、次のようなヴィジョンを提示した。

知能指数170の子どもが、旧石器時代例えばラスコーの洞窟画が描かれた時代に生まれたとしたら一体どうなただろうか。もちろん彼は、狩りをしたり食べ物を採集したりする以外何もできなかっただろう。何かそれ以外のものになれるチャンスなど彼には到底なかった。生物学者に言わせれば、生理学的あるいは解剖学的には、私たちは二万年前とほとんど変わっていないし、後期旧石器時代の人間と本質的には同じ道具を使っている。それなのに私たちは今、その同じものから驚くほど違った結果を産み出すことができる。この二万年の間わたしたちは数え切れないほどたくさんのごことを実現してきたが、それらはその後ずっと人間にとって潜在的な能力として機能してきた。。。だからこそ私たち人間にはいまだに多くの潜在的な能力がある、つまり理性においても感情や思いやりにおいても、また創造性においてもいまだに人間のうちに潜んでいるものがある、と考へても 楽観的過ぎるとは言えないだろう。近年驚くべき速さであらゆるものが発達しており、旧石器時代以来この二万年間に私たちの祖先が成し遂げてきたことを、今から数百年の間にはるかに越える方法を見出すことも不可能ではない。そう考へてもまったくの絵空事だとは思わない。神経生理学者の研究から、いかなる人間も脳の神経の一割さえ使っていないということが分かってきた。もし正しい方法でとりかかると、この人間という奇妙な存在からとてつもないものを生み出すことができるかもしれない。⁷

このハックスレーの講演を聞く聴衆の中に、名門スタンフォード大学の卒業生リチャード・プライスという一人の若者がいた。中西部の裕福な家庭に育ったプライスは、スタンフォード大学で心理学を学びハーバード大学でトレーニングを受けた後、50年代後半ビートシーン真っただ中のサンフランシスコに移り住んでいた。心理学者を志していたプライスは、アラン・ワッツと出会いアジアの宗教に関心を抱くようになり、禅寺に通って瞑想を実践していた。そのプライスがある日、サンフランシスコのゴールデンゲート・パークの側にある瞑想センターでマイケル・マーフィーというスタンフォード大の卒業生と出会った。この出会いこそ、60年代以降のアメリカ文化に多大な影響を及ぼす事になったエサレン研究所の設立、ひいてはヒューマンポテンシャルムーヴメント（人間の潜在的な能力開発運動）を生み出すきっかけとなった。

プライスと同じく裕福な中産階級に生まれ、医者を目指してスタンフォード大学に入学したマイケル・マーフィーは、偶然東洋学の権威フレデリック・スピーゲルバーク教授の講義に出席したことから、ヒンズー教や仏教などのアジアの宗教に興味を抱くようになった。東洋宗教学の権威であり、

1920年代から30年代にかけてフランクフルトでブーバーやティリッヒの同僚として過ごしたスピーゲルバーグは、インドのシュリ・オーロビンドのアシュラムから帰国したばかりだった。スピーゲルバーグが自らの実存的関心をもって生き生きと語るインド哲学に衝撃を受けたマーフィーは、スタンフォード大学を卒業するとオーロビンドのアシュラムに滞在し、帰国後もオーロビンドの弟子で彼の教えをアメリカに伝えるために派遣されていたハリダス・チョウドリーが設立した瞑想センター（後のカリフォルニアアジア学院、現在のCalifornia Institute of Integral Studiesカリフォルニア統合学大学院）に住みこんだ。その瞑想センターで出会ったブライスとマーフィーの二人はすぐに意気投合し、互いの夢を語り合い、ブライスが聞いたオルダス・ハックスレーのヴィジョンを実行に移す決心をした。

マーフィーの祖父母はヘンリー・ミラーらポヘミアンが住む静かな保養地ビッグ・サー海岸に、温泉を所有していた。アラン・ワッツやスピーゲルバーグ、それにスタンフォード在学時のブライスの指導教官であったグレゴリー・ベイトソンらの助言を受けた二人は、その温泉をリトリート・センターに改装し、人間の潜在的能力を実現する様々なワークショップを企画する計画を立てた。1962年ビッグ・サーに移り住んだマーフィーとブライスは、スタッフを集め建物を改造しワークショップ開催の準備を進めたが、そんな彼らにある日思いがけない出会いが訪れた。

夕焼けの美しい夏の日のことであった。次第に夕闇が濃くなるビッグサーの海岸沿いのハイウエーを、初老に差し掛かった夫婦が1台の車を走らせていた。次の町まではまだ相当な距離がありどこかに泊まれる場所を探していた二人は、ふと道路沿いに明かりを見つけ、モータールと思ってその敷地に車を乗り入れた。出迎えた若者は二人を快く迎え入れ、部屋の鍵を渡すと宿帳にサインをするよう頼んだ。ところがその夫婦のサインを見た若者は突然、「あなたの書かれた本を丁度読んだばかりですよ」と叫び仲間を呼びに走った。その初老の夫婦こそ他でもない人間性心理学の創始者エイブラハム・マズローとその妻バーサであり、彼らが偶然訪れたこの宿が後のエサレン研究所だったのだ。

行動主義の実験心理学者として学究生活を始めたマズローは、ナチスの迫害を逃れてきた優れた心理学者、哲学者たちが集まる1940年代の「知的るつぼ」ニューヨークで学者としての多様な人脈を培った1950年代までの心理学会は、人間を病的に捉える精神分析や機械的に捉える行動主義心理学が全盛であったが、マズローは次第に健康な人間の心理学の必要性を痛感するようになり、同じ方向性をもつ心理学者や哲学者に呼びかけ1961年に人間性心理学会を創設した。1962年に出版した「*Toward a Psychology of Being*」（邦訳『完全なる人間』誠信書房）の中でマズローは、それまで宗教的な体験として特別視されてきた、喜びに満ち、幸福で、人生に対する力強い確信をもてる瞬間の体験を、「至高体験」という概念を使って心理学的に位置づけ、多くの人々がそうした体験を普通考えられているよりもっと頻繁に経験していることを明らかにした。このマズローの理論こそ、人間の潜在的能力の開発をめざすマーフィーやブライスたちのヴィジョンを心理学的に表現するのにうってつけのものだった。この偶然の出会いを喜んだ彼らは、マズローにできたばかりのワークショップのカタログを見せ、自分たちのビジョンを語った。若者達のビジョンに共鳴したマズローは、誕生まもない人間性心理学会など自ら参加するいろいろな会合で、折に触れエサレン研究所の存在とそのビジョンを喧伝し、1969年に心臓発作で亡くなるまで一貫してエサレン研究所の発展に大きな役割を果たした。

マズローが偶然エサレン研究所を訪れた1962年の夏、ウィリス・ハーマン、グレゴリー・ベイトソン、ミロン・ストラロフらスタンフォード大学の教授陣を中心に、最初のエサレンセミナーが行われた。当時まだ一般には知られていなかったLSDによる神秘体験や文化的社会的な精神病の意味

についての一連のレクチャーは画期的なものだったが、講義中心の知的なスタイルに対する不満も参加者の間で沸き上がってきた。オルダス・ハックスレーは人間の潜在能力を引き出す具体的な方法として、フランツ・マティアス・アレキサンダーの開発したアレキサンダー・テクニクやウイルヘルム・ライヒのオレゴンセラピー、フレデリック・パールズのゲシュタルトセラピーなどの体験的技法について語っていた。そこでマーフィーたちは、ハックスレーやアラン・ワッツなどを通して話を聞いていたセンソリアウエアネスを教えるシャーロット・シルバーとゲシュタルトセラピーのフリッツ・パールズをエサレン研究所に招待することにした。彼らの参加によって知的な探求として始まったヒューマン・ポテンシャル運動は、体験中心の実践的な「癒しの運動」として大きな広がりを見せるようになり、体験中心のワークショップは新しい癒しのメッカとしてのエサレン研究所の大きな特徴となった。こうしてシャーロット・シルバーとフリッツ・パールズだけでなく、アイダ・ロルフ、モッシュ・フェルデンクライス、エンカウンターグループを指導するビル・シュッツ、ウイリアム・ライヒの後を継いでバイオエナジーを開発したアレキサンダー・ローウェンなど現在ソマティクス (Somatics) と呼ばれる西洋の身体技法のパイオニアの多くがエサレンで独自の癒しの技法を展開していった。

1965年秋のエサレン研究所のカタログを見ると「心理療法と人間の成長の最先端の問題」(ロロ・メイ)、「変革期にあるキリスト教」(アラン・ワッツとパイク司教)「自己イメージの変革について」(ガードナー・マーフィ)、「人間行動の科学的説明から派生する諸価値について」(B・F・スキナー)、「創造性の心理学」(フランク・バロン)、「超心理学と人間の本質」(J・B・ライン)といったセミナーに加え、音楽やダンス、エンカウンターグループ、セラピーや瞑想の体験的セッションが並んでおり、冒頭にはジョージ・レオナードの手による次のようなエサレンのビジョンが描かれていた。

私たちの世代はめざましいばかりの物質的な環境の変化を経験してきた。しかしこれまで、わたしたち一人一人がそうした世界とどのように関係を持つか、また現実をどのように体験するかといった点についてはほとんど変化がなかった。けれどもそうした変化が起きるのは必然であり、いやむしろ差し迫ったものとさえ言える。多くの一般の人々あるいは知識人の間ではまだ知られていないが、人間の潜在的可能性に関する新しい技法や道具はすでに私たちの手の届くところにあり、そしてさらに多くのものが開発されつつある。私たちは、今や危険ではあるが心躍るフロンティアに立っている。そしてあの言い古された問いに、新たな答えを見つけなければならないのだ。『人間の能力の限界はどこにあるのか、人間はどこまで体験することができるのか。そもそも人間であるというのはどういうことなのか』⁸

エサレン研究所は、こうした問いに答えるべく、文字どおり実験場としてあらゆる角度から人間の可能性を探る試みを展開していった。60年代にエサレン研究所を訪れたりセミナーを開いた人々の名前をみると、ケン・キージ、ティモシー・リアリー、リチャード・アルパート、アラン・ワッツといったニューエージの教祖たちだけでなく、神学者ポール・ティリッヒ、哲学者ノーマン・O・ブラウン、人間性心理学者カール・ロジャース、家族療法の創始者の一人ヴァージニア・サティア、歴史学者アーノルド・トインビー、実存主義神学者ポール・ティリッヒ、エписコパル派司教のジェームズ・パイク、写真家のアンセル・アダムス、ノーベル賞受賞者のライナス・ポーリング、後に上院議員になった言語学のS・I・ハヤカワ、フォークシンガーのジョーン・バエズ、ボブ・ディラン、サイモン&ガーファンクル、といったそうそうたる名前が連なっている。そして60年代の終わりまでに、全米にエサレン研究所のようなリトリートセンターが数多く生まれ、それまで限

られた人にしか知られていなかった様々な癒しの方法がより多くの人々に知られるようになった。オルダス・ハックスレーがビジョンとして説いた人間の潜在的成長の可能性を現実のものとして多くの人が体験することになったのである。

60年代にエサレン研究所で行われたヒューマンポテンシャルムーブメントの理想を一言で言えば、「自分の疎外されたり抑圧されてきた部分に触れ、本来の自分を取り戻すこと」であった。マズローが唱えたように、人間は生まれながらに全体的で統合された存在であり、自らの人生を十分に意味あるものとして過ごす能力をもっており、そういう状態であることを許さない社会こそが病気の原因である、というのがこの運動に関わる人々の共通の見方であった。それまでの精神医学では、自我と社会の軋轢を解消し人々を社会に適応させることが主な目的であったのに対し、エサレン研究所で行われた様々な癒しの技法は、逆に社会にあまりに適応しすぎ自分をがちがちにコントロールしている人々をこそ問題にし、そうした人々を成長とより大きな統合に向けて解放していくことを目標にしたのだ。こうした心理療法の新たな方向性は、精神的な障害ではなく人生の意味を見出せないことに苦しんでいた多くの人々によって支持され、フロイト以来の心理療法に新たな方向性を生み出す事になった。⁹そしてヒューマンポテンシャルムーブメントを通して、60年代の「気づき、創造性、洞察、感情移入、感情表現、体験を味わう力」を育てるといった目標に満足した人々は、次第により広い人間の可能性としての自己を越えた領域の体験、いわゆる「宇宙感覚、超越的洞察」といったへとその関心を移し、心理療法から次第に東洋の宗教に目を向けるようになったのである。

1970年代：トランスパーソナル心理学とニューサイエンス

エサレン研究所を中心にヒューマンポテンシャルムーブメントが盛んになったのと平行して、60年代全米を様々な社会運動が駆けめぐっていた。キング牧師の指導による黒人の公民権運動、女性の解放を目指すウーマンリヴ運動、カリフォルニア大学バークレー校から始まったフリースピーチ運動、北爆開始で泥沼の様相を呈してきたベトナム戦争に対しスタンフォード大学から起こったベトナム反戦運動。こうした様々な社会運動の中で60年代後半から70年代前半の時代の特徴を最も飾ったのは、ヒッピー運動とLSDを初めとする向精神薬（ドラッグ）の存在である。1938年に製薬会社の研究員が偶然発見したLSDは、1950年代後半からシカゴ大学やハーバード大学などの研究グループによって様々な知識人、宗教家、芸術家の間で実験が繰り返されていた。そのLSDが一般の人々の間に急速に広まるきっかけを作ったのが、ハーバード大学のティモシー・リアリーとリチャード・アルパートであった。リアリーの「チューンイン・ターンオン・ドロップアウト」を合い言葉にカリフォルニアに向かった若者達は、LSDをはじめとする様々なドラッグと共にあらゆる旧式のしきたりを否定するヒッピー文化を築いていった。しかしながら、1967年夏サンフランシスコのヘイト・アシュベリー地区を中心に、ある種の異常な解放感に包まれた「サマー・オブ・ラブ」で頂点に達したヒッピー文化は、裕福な若者達につけこむ人々によってその純粋な解放感を失っていき、チャールズ・マンソン事件を契機に急速に終焉を迎えた。

60年代から始まったドラッグの大衆化は、自殺や犯罪につながる様々な問題を引き起こしたが、その一方でかつてない数の人々にマズローの語る「至高体験」をもたらすことにもなった。良きにつけ悪きにつけドラッグの大衆化をもたらしたティモシー・リアリーは、こうしたドラッグの服用に際して「セットとセッティング」の重要性を強調していた。リアリーによれば、こうしたドラッグは一種の触媒の働きをするだけで、ドラッグを服用して体験する内容は、その人の内面から出てきたものであり、その際にその人がどのような心理状態でドラッグを服用したかが体験の内容を大きく左右するということだった。もしドラッグの服用時に何らかの否定的な気持ち、例えば恐怖や

罪悪感を抱いていると、そうした感情が増幅され体験に投影されるというのだ。その一方でゆったりと安心できる環境でそうしたドラッグを服用した場合、様々な宗教で述べられている自我を越えた意識を体験できることも多くの人々が実感していた。このドラッグ文化を通じての自我意識を越えた体験とエサレン研究所を中心とするヒューマンポテンシャルムーブメントの発展の中から新たに生まれてきたのが、トランスパーソナル心理学だった。

1967年サンフランシスコのユニテリアン教会で、エサレン研究所の主催で行われた「人間の潜在的能力のさらなる到達点」と題する講演の中で、マズローは人間性心理学の次の段階としてのトランスパーソナル心理学の誕生を宣言した。エサレン研究所での実験などを通し、人間の成長が自己実現を越えた自己超越にまで広がることを予感していたマズローは、チェコスロバキアで3000以上ものLSDの臨床例の研究から同じような結論に達していたスタニスラフ・グロフとの出会いをきっかけに、人間性心理学を越えたトランスパーソナル心理学の設立の必要性を感じていた。そして、アンソニー・ステッチ、ジェームズ・ファディマンらの協力を得て、トランスパーソナル心理学誌の発刊の準備を進めた。1969年、マズローは心臓発作により突然亡くなってしまったが、彼の死を乗り越え同年トランスパーソナル心理学学会誌の第一号が発行され、続いて第一回トランスパーソナル心理学学会が開かれた。

トランスパーソナル心理学の研究では、向精神物質によってひきおこされる体験、あるいは禅やヨガなどの伝統的修行からグルジェフやオスカー・イチャゾらの秘教主義的サークルで行われる修行による体験まで、日常の意識と異なる様々な体験が「変成意識体験」として共通の視点から捉えられていた。70年代のトランスパーソナル心理学は、メインストリームの心理学からみればまったく胡散臭いそうした体験を、何とか既存のアカデミズムの中で学問的に価値のある研究として位置付ける方法を探ろうと努力していた。そうした目的に沿って、スタニスラフ・グロフやチャールズ・タート、ロジャー・ウオルシュらトランスパーソナル心理学者たちは、メンリナー財団やラホイヤの人間研究センターなど既存のアカデミズムに属する心理学者や研究者たちと協力し、トランスパーソナル学会誌を中心に精力的に論文や著作を発表していった。

そうした揺籃期のトランスパーソナル心理学を支え、またドラッグから東洋宗教へと移る60年代から70年代にかけての時代の変化を最も象徴した人物がリチャード・アルパート（ババ・ラム・ダス）だった。LSDの実験と普及の責任によってティモシー・レアリーと共にハーバード大学を追われたアルパートは、インドで出会ったニーム・カロリ・ババというヨガの修行者にLSDを飲ませたところ、大量のLSDを飲んでみてもいっこうに変わった様子を見せなかったことから、東洋の宗教の修行法がドラッグによって引き起こされる一時的な意識をより永続的な状態へと導くことに気づいた。自らヨーガの修行者となりババ・ラム・ダスと改名したアルパートは、1971年アメリカに戻ってその体験を「ビー・ヒア・ナウ」（邦訳平河出版）という本に著した。ベストセラーとなったこの本は、禅やヨガといった東洋の修行法に対する全米の若者の関心を掻き立て、60年代のヒッピー・ドラッグ文化を体験した多くの人々が、70年代に入りより永続的な体験とそうした体験を理解するための広い枠組みを求めて東洋の宗教に目を向けるきっかけを作った。

70年代の東洋宗教ブームを支えたもう一つの要因は、60年代後半からアメリカに続々と渡ってきたアジア宗教の指導者たちだった。歴史的に見ると、アメリカにおける東洋の宗教の紹介は三段階に分けられる。まず、19世紀初頭のトランセンデンタリズムに代表される、イエズス会修道士や東洋学者によって翻訳されたヒンズー教や仏教、儒教、道教などの古典を通して東洋宗教の教えが吸収される段階があった。それから19世紀末になると、東西の宗教者の直接交流が始まった。まず神智学協会のブラバッキ夫人のように、インドに渡ってヒンズー教や仏教を独自に吸収、解釈する西

洋人が現れ、そうした西洋人独自の解釈を通しての東洋宗教の理解があった。その一方で1898年にはシカゴで国際宗教者会議が開かれ、スワミ・ヴィヴェカナンダや釈宗演ら東洋の聖者、老師が強烈な印象を与えた。しかしこうした交流は1910年代から始まったアメリカのアジア系移民制限法によって断ち切られてしまい、東洋宗教の理解はまた主に書物を通じて行われる状態が続いた。しかし、1965年そのアジア系移民制限法が緩和されると、多くのアジア系移民とともにアジアからの宗教活動家がアメリカに渡ってきた。その結果60年代後半のアメリカには、それまで主に書物を通してしか触れることのできなかったヒンズー教、仏教、道教などの教えを直接説き、また東洋の宗教においては不可欠な瞑想などの修行の実践法を伝える指導者が現れたのだ。中でも、チベット仏教のチョギユーム・トゥルンパ、タータン・トウリュク、禅仏教の鈴木俊隆らは仏教の修行法としての瞑想を教えるだけでなく、ナロパ研究所やニンマ研究所、サンフランシスコ禅センターといった瞑想センターを創設し、実践的なアメリカ仏教の種を蒔いた。こうした流れと共に、ケネディ大統領の創設した平和部隊の一員として東南アジアへ渡った人々が、そこで触れた上座部仏教を持ち帰り、新たな仏教の実践を始める動きもあった。ジャック・コーンフィールドに代表されるこうした流れは、80年代、90年代に入っても着実に進み、全米に禅やチベット密教の瞑想センターだけでなくヴィパサナの瞑想センター、ヨガのスタジオ、ヒンズー教のアシュラムなどが数多く作られ、そこで多くの人々が瞑想を体験するようになった。

こうした70年代の実践を重視する東洋宗教の影響の中から現れたのがトランスパーソナル心理学最大の理論家ケン・ウィルバーであった。1977年「Spectrum of Consciousness」（邦訳『意識のスペクトル』春秋社）で衝撃的なデビューを飾ったウィルバーは、それまで雑多な集まりでしかなかった心理学の諸流派や様々な宗教の教義を独自の意識論で統一的に解釈し、トランスパーソナル心理学の基本的な理論を提示した。以後立て続けに優れた理論書を著わしたウィルバーは、1985年から10年近い沈黙を経た後、1995年に大著「Sex, Ecology and Spirituality」（邦訳『進化の構造』春秋社）を出版して以降現在に至るまで再び精力的な執筆活動を続けている。

トランスパーソナル心理学に見られるような「新たな心理学」の動きが始まった70年代は、西洋近代科学と宗教の融和を目指すニューサイエンスが生まれた時期でもあった。近代科学の還元主義的、二元論的傾向を乗り越え宗教的な次元をも含めうるような科学理論を求めるこのニューサイエンスの代表が、1973年カリフォルニア大学バークレー校の物理学者フリッチョフ・カプラが著した「Tao of Physics」（邦訳『タオ自然学』工作舎）だった。ブーツストラップ理論に代表される当時の物理学の先端理論と、華嚴教で説かれた宇宙観の相似を示したこの本は、カプラ自身のヒンズー教や仏教の理解がオリエンタリズム的色彩の濃いものであるにも関わらず、科学と宗教に対する「新しい」アプローチを提供していた。それは冒頭にカプラ自身の神秘体験が描かれているように、まず著者の体験があり、その体験の理解の枠組みとして西洋科学と仏教が矛盾しないという視点だった。カプラ以降、こうした神秘体験をも視野に入れることのできるより包括的な枠組みとしての科学理論は、ニューサイエンスと呼ばれるようになった。その中には、カール・プリブラムの「脳のホログラフィック理論」、デヴィッド・ボームの「織り込まれた秩序理論」、イリア・プリコジーヌやフンベルト・マツラナとフランシスコ・ヴァレラの「自己組織化理論」、ルパート・シェルドレークの「形態形成場理論」、ジェームズ・ラブロックの「ガイア理論」などがある。こうした様々な理論はニューサイエンスとして一括されているが、例えばプリコジーヌの理論は時間の進行に基づく理論であるのに対し、ホログラフィック理論は時間とは関わりのない理論であるように、そこには統一した世界観は必ずしも見いだされない。実はこうしたニューサイエンスには大きく分けて二つの種類がある。一つはカプラに代表されるように、自然科学（特に理論物理学）の理論と仏教などの東洋宗教の世界観との類似を説くもの。もう一つは、ボームやプリブラムのホログラフ

ニックパラダイムあるいはプリコジヌの自己組織化理論のように、それぞれの分野で最先端を行く科学者の唱える理論が、マリリン・ファーガソンやエリッヒ・ヤンツといった科学評論家によって「還元主義的あるいは二元論的科学を乗り越える可能性のある新しい科学理論」として紹介されポピュラーになったものだ。こうしたニューサイエンス全般に対しては、80年代に入ってケン・ウィルバーが階層性を重視する「永遠の哲学」の見地からその矛盾や物理学への還元主義的傾向に対して鋭い批判を浴びせており、カプラ自身はブーツストラップ理論に基づく「タオ自然学」の立場を後に修正し、現在はむしろ生命科学やシステム理論に依拠する論を張るようになっていく。

1980年代：チャネリングとネオペーガニズム運動

80年代に入ってニューエイジ運動はカリフォルニアの地域文化からアメリカ全土に大きな広がりを見せるようになったが、その原動力となったのがチャネリングブームであった。霊との交流によって宇宙の秘密を解きあかす交霊術は、スエーデンボルイの著作以来 秘教主義のサークルでは珍しいものではなかった。19世紀後半からでもブラバッキー夫人の「Secret Doctrine」やエドガー・ケーシの一連の著作はそうした霊とのコンタクトによって得られた啓示を説く本の代表として読まれていたが、もちろんそうした著作の読者は極めて限られた層の人々であった。ところが1968年、エサレン研究所の理事の一人でありサンフランシスコのグレースカテドラルの司教であったジェームズ・パイクが、亡き息子の霊との交霊体験について書いた「The Other Side」が出版されると、全米にスピリチュアリズムへの関心が呼び起こされた。そうした中で、70年代から80年代にかけてジェーン・ロバーツが著した一連の「Seth」シリーズと、ニューヨークの心理学者ヘレン・シュックマンがキリストの霊とコンタクトした記録の「Course in Miracle」は、それまでニューエイジに関わってきた人々だけでなく、ニューソートなどのキリスト教の教派に属する人々にも受け入れられ、広範な読者を獲得した。「Course in Miracle」の学習会を機に、こうしたキリスト教系の人々の間でもヨガやマッサージ、リバーシング、サイコシンセシスなどニューエイジの間でポピュラーな心理療法のクラスがもたれるようになり、ニューエイジ運動は全米のキリスト教のさまざまな教派に浸透していった。

ところで、80年代に行われたチャネリングは、霊とコンタクトするという形から見れば19世紀のスピリチュアリズムで行われていたものと何ら違いのないものだったが、その目的はこれまでの交霊術とはまったく異なるものだった。スピリチュアリズムで行われた霊とのコンタクトでは、死者の世界にいる霊との交流を通して死後の世界の実在を確認し、またキリストなどの偉大な霊によって人間がなぜ存在するのかといった重大な問題に対する答えを受け取るというものだった。ところが80年代に広まったチャネリングは、身近な死者の霊と交流することが目的であったそれまでの交霊術と異なり、チャネラーは偉大なグルや聖者の霊からの導きを得てクライアントの個人的な問題を解決し、クライアントが個人的な変容を体験することを目的にしていた。この80年代のチャネリングブームのもう一つの特徴として、クリスタルやその他の宝石の利用がある。もともとエドガー・ケーシによって説かれたクリスタルの効用は、80年代に入ると変容の象徴、癒しの道具としてニューエイジの間でもはやされるようになったが、スペングラーのように古くからのニューエイジに属する人々は、こうした個人の変容としてのチャネリングやクリスタルの流行を物質主義あるいはナルシズムだと批判している。

70年代から80年代に広まったニューエイジ運動にとってもう一つの大きな問題がグルイズムであった。例えば、エサレンの創始者の一人リチャード・プライスは1977年、ラジニーシの弟子になるべくインドの彼のアシュラムを訪れた。アラン・ワッツとスピーゲルバークを通して東洋の宗教に触れ、フリッツ・パールズやアイダ・ロルフ、ビル・シュッツらのワークを吸収してきたプライス

がインドのグルの元を訪れその弟子になるということは、アメリカのヒューマン・ポテンシャル運動がそのスピリチュアルな探求の次の段階に入る可能性を示唆していた。しかしながら、プーナに滞在したプライスが体験したものは、実験的探求の名の元にセクシュアリティと暴力が無制限に表現される混沌とした状況だった。ラジニーシのアシュラムの実態に失望したプライスは、そこに成長よりも新たな権威の発生を見、インドを後にした。このプライスの体験は80年代のアメリカにおける様々な東洋の宗教が引き起こした精神的修行と権威主義の葛藤に警鐘を鳴らすものであり、こうした問題はラジニーシのグループだけでなく、チョギヤム・トゥルンパやスワミ・ムクタナンダら他のアジア宗教の指導者や彼らの高弟たちのところでも起こった。数少ない例外を除き、アメリカに渡ってきたアジア宗教のほとんどのグループがこうした金と女性関係のスキャンダルにさらされたのだ。こうしたスキャンダルは、たんに宗教指導者一人一人の倫理の問題というよりは、東洋の伝統文化の中で成立していた弟子と師匠の関係、あるいは宗教組織のあり方が、資本主義と個人主義を基調とする現代アメリカ文化にもちこまれたときに浮かび上がってきた問題と捉えられる。東洋の宗教における権威主義に対する反省は、しかしながらニューエージ運動においてあるポジティブな流れも生み出した。それはアメリカ仏教に数多く参加してきた女性たちが、地道な自らの瞑想の体験を基に、仏教の父性主義的な要素に対して理論的な批判を展開し、アメリカ仏教の新たな方向性を示すようになったことだ。

こうした女性からのスピリチュアリティのあり方に対する異議申し立ては、仏教だけでなくキリスト教内部での女性のスピリチュアルな改革運動においても見られた。80年代以降盛んになったネオ・ペーガニズムと呼ばれるこれらの運動では、近世の魔女裁判に見られるようにウィッチクラフトと呼ばれ弾圧されてきた魔女の儀式を、キリスト教の組織化の過程で抑圧されてしまった女性神の信仰と捉え、積極的にその意義を見直し復活させようとしている。こうした女性のスピリチュアリティ回復運動は、60年代からのフェミニズム運動の新たな展開とニューエージ運動の結合したものとしてアカデミズムから一般の主婦層まで広い範囲の女性を巻き込み、アメリカにおける女性運動の大きな柱となりつつある。

ネオ・ペーガニズム に代表される女性のスピリチュアリティ回復運動は、大地の母としての女神崇拜を基盤とした大地信仰への回帰でもある。そうした大地信仰への回帰運動の背景には、70年代から80年代にかけてアメリカのニューエージ運動の中で大きな流れを占めるようになった、ネイティヴ・アメリカンのスピリチュアリティに対する関心がある。そうした関心の発端となったのは、1968年にUCLAの人類学者カルロス・カスタネダが発表したフィールドワークの記録

「Teachings of Don Juan」(邦訳『呪術師と私』二見書房)であった。ヤキ族インディアンの呪術師ドン・ファンとの出会い、彼の教えに従ってカスタネダが行うスピリチュアルなトレーニングの過程を描いたこの本は、ドラッグによって「非日常的リアリティ」を体験した人々に、ネイティヴ・アメリカンのスピリチュアリティや世界観に対する関心を呼び起こした。カスタネダの著作は「非日常的リアリティ」を生きる戦士への道をテーマに、70年代から80年代にかけて彼の修行の過程に沿って次々と出版された。彼の著作がシャーマニズムに対する憧れを掻き立てたのに対し、1980年に出版されたマイケル・ハーナーの「Shaman's Way」(邦訳『シャーマンへの道』平河出版)は、自らシャーマニズムを実践するより具体的な方法を提供した。この本の中でハーナーは、シャーマニズムを「健康と癒しのための方法」と位置づけ、現代社会に生きるアメリカ人が実際にシャーマニズムを実践する方法を一般的なワークショップという形で提示した。非日常的意識という観点からシャーマンの旅を位置づけ、トランスパーソナル心理学とシャーマニズムの接点を明らかにしたハーナーの著作によって、シャーマニズムは「意識の変容」の実践法という観点から脚光を浴びることになったのだ。

こうしたシャーマニズムの実践に対する関心は、70年代から80年代にかけてアメリカインディアンの先住民としての権利回復と差別撤廃運動によって起こったネイティブ・アメリカン自身のスピリチュアルな伝統に対する復興運動と密接な関係をもっていた。それまで白人によって禁止されてきたパウパウやサンダンスといったお祭りが若者の手によって復活され、伝統的宗教儀式の価値が見直されていくとともに、ネイティブ・アメリカンのスピリチュアルな伝統が白人にもオープン化され、シャーマンの元で修行をする白人が数多く現れた。80年代にハーナーの手によって蒔かれたシャーマニズムへの関心は、90年代に入りそうしたネイティブ・アメリカンの元で学んだ白人や自らの居留地を離れ白人の間で暮らすネイティブ・アメリカンのシャーマンによってスエット・ロッジやビジョン・クエストといった「癒しの儀式」が数多く行われることで、より大きな広がりを見せたのだ。

また冷戦終結後の90年代、人類生存の最大の危機とされる地球環境問題 が差し迫ったものになるにつれ、ネイティブ・アメリカンのエコロジカルな世界観がそうした環境危機への解決法を提示するものとして注目された。80年代以降のこうしたネイティブ・アメリカンのシャーマニズムと大地信仰に対する関心の高まりは、環境問題を解決するには人類の意識の変革が不可欠であるとするディープエコロジー運動として、ニューエージ運動の重要な要素を占めるようになった。

1990年代：ホリスティック医学運動と意識研究にみられるメインストリームへの浸透

1987年にタイム誌がニューエージの特集を組んだことは、ニューエージ運動がすでにマージナルなサブカルチャーから脱しメインストリームの文化の大きな部分として位置づけられたことを示すものであった。その一つの例が、60年代の対抗文化の流れを受け継ぎ、80年代に入って大きな位置を占めるようになったホリスティックヘルス運動である。19世紀から細々と続いてきたカイロプラクティックやホメオパシー、60年代からのヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントの中で広まったソマトイクスと呼ばれるロルフィングやフェルデンクライス体操、マッサージ、あるいは針治療や気功など数千年の伝統の上にたつ東洋医学などは、機械論的還元主義に行き詰まった西洋近代医学の代替医療として、ごく限られた人々の間で実践されていた。それが70年代から80年代を通して、人間を身体、心、精神の全体的存在と捉えるホリスティックヘルス運動として一般の人々へとじっくりと浸透していき、次第にその影響力を増していた。

こうした非西洋医学の実践の広がりが、人々の注目を浴びたのが、1993年アメリカの医学誌として最も権威のある「The New England Journal of Medicine」誌にハーバード大学医学校の調査グループが発表したレポートであった。¹⁰アメリカの総人口の三分の一以上がリラクゼーション、針治療、カイロプラクティック、マッサージ、スピリチュアル・ヒーリングなどの非西洋医学に医療費の総額とほぼ同じ額を支払っているという現実、西洋医学のメインストリームではそれまで無視されてきたこうした非正当医療を医学教育や臨床研究に組み込んでいく流れを生み出した。そして、その結果1997年全米医学界は針治療の有効性を公式に認める声明を発表するに至った。1998年に提出された追跡調査の結果はこうした流れをさらに押し進め、非西洋医学を西洋医学の補完、代替物とする考えから、西洋医学の根本的なあり方に修正を加え、そうした非西洋医学と西洋医学を統合した新たな医学、統合医学の創出に向かう大きな変化を生み出している。

こうした非正統的医療の多くが70年代からのニューエージ運動の中で産み出されたり、復活してきた「癒しの技術」であることは、ニューエージ運動の一般社会への浸透を物語るものと言える。ニューエージ運動のメインストリームへの浸透は、トランスパーソナル心理学が長年携わってきた意識研究の分野にも見られた。1994年、ジョン・エックルス、ロジャー・ペンローズといったノーベ

ル受賞者やダニエル・デネット、スチュアート・ハメンホフら意識研究の最前線を行く哲学者、それにウィリス・ハーマン、ヒューストン・スミス、ロジャー・ウオルシュらトランスパーソナル心理学サークルでもお馴染みの学者たちが編集委員となって『Journal of Consciousness Studies』という雑誌が発刊された。認知科学や心理学、哲学だけでなく、意識の問題に関心を持つ様々な分野の先端の学者たちが寄稿するこの学際的雑誌は、西洋近代科学を長らく支配してきた客観的リアリティーを前提とする認識論の枠組を根底から問いなおし、主/客分離、還元主義の限界を越えた新たな認識論的枠組みを構築し、あらゆる観点から意識を研究することを目指すものだった。これまでマージナルな存在と受けとめられてきたトランスパーソナル心理学者たちの理論や研究が、こうした雑誌で真剣に取り上げられることは、意識研究の分野においては、トランスパーソナル心理学がメインストリームのアカデミズムに受け入れられたことを示していると言えよう。

しかし、こうしたメインストリームによるトランスパーソナル的研究の受容は、皮肉な事に一方で既存のトランスパーソナル心理学や人間性心理学の学会活動や学会誌の存在を危機に陥れてしまった。70年代から80年代にかけて、既存の学術誌や学会では受け入れられない変成意識や瞑想をテーマにした論文、あるいは現象学や解釈学に基づく質的方法論に則った論文の受け皿として重要な役割を果たしてきたJournal of Transpersonal PsychologyやJournal of Humanistic Psychologyは、90年代後半から掲載論文の減少により廃刊の危機に追い込まれている。これは、既存のアカデミックな学会誌の多くがこうしたテーマの論文を受け入れるようになり、またアメリカ心理学会のようなメインストリームの学会でも、瞑想やスピリチュアリティに関する研究の発表が可能になったことが原因である。その結果、トランスパーソナル学会や人間性心理学会は学会としての存在価値を失い、会員数の減少に苦しんでいる。90年代はこのようにニューエージ運動がアメリカ社会一般に広く浸透していった時代であると同時に、もはやニューエージ運動という特定の流れからより広い範囲での社会運動へと発展的に解消されていく時代に入ったことを物語っている。

21世紀に向けて：キリスト教原理主義とニューエージ運動の対立

2001年9月11日世界貿易センタービルを崩壊させた自爆テロは、アメリカ社会だけでなく世界全体を震撼させた。この日を境にブッシュ政権は、世界に向けてアメリカはあらゆる犠牲を払って「自由のための戦い」を敢行すると宣言した。2004年の大統領選挙で顕著になったのは、そうしたブッシュ政権を支持するキリスト教原理主義勢力のアメリカにおける伸張である。キリスト教原理主義は、聖書に書かれている事を文字通りの事実として信仰し、中絶や進化論を公教育で教えることに反対しているプロテスタントのファンダメンタリストであるが、彼らは60年代以降のアメリカの家族形態や道徳的な価値観の変化をニューエージ運動（あるいはカウンターカルチャー）がもたらした伝統的価値観の崩壊と捉え、家族の価値の重視と強いアメリカ国家の復活を訴えている。80年代のレーガン政権以降アメリカ社会の中で次第に大きな勢力となってきたこうしたキリスト教原理主義者は、ニューエージ運動が追求してきた人間性を基盤とした多様なスピリチュアリティのあり方に、真っ向から反対している。90年代以降主にカリフォルニアやニューヨーク、シカゴなどの大都市圏を中心としたアメリカ社会にニューエージ運動が浸透した一方で、キリスト教原理主義者たちは南部や中西部を中心に、そうしたニューエージ運動こそがアメリカ国家を衰亡させているとして、様々な形で、対抗手段を実行し始めている。2004年の大統領選挙で明確になったこのキリ

スト教原理主義対ニューエーじ的価値観の対立こそが、21世紀のアメリカ社会、ひいては世界の動向に大きな影響を与えることになると思われる。

このキリスト教原理主義とニューエーじ運動の対立は、単なるアメリカ政治の保守と革新、あるいは自由主義と原理主義の対立と捉えることはできない。そこには、建国以来アメリカが抱えてきたスピリチュアリティに関わる複雑な問題が現れている。これまで概観してきたように、ニューエーじ運動は60年代のカリフォルニアで突如始まったものではなく、18世紀のヨーロッパから連綿と続く、教会の桎梏を逃れ直接的なスピリチュアリティを希求する一般民衆の運動の長い歴史の中に位置づけられる。1970年に「New Religions」でこうしたニューエーじ運動の宗教運動としての役割をいち早く評価しその宗教的意味を明らかにした哲学者ジェイコブ・ニードルマンは、近著「The American Soul: Rediscovering the Wisdom of the Founders」の中で、建国以来アメリカを築いてきた価値を検討し、その価値を再認識する事の重要性を説いている。ニードルマンによれば、アメリカを形作ってきたのは、物質的な繁栄や政治的な自由といった外的な価値の追求ではなく、世界のスピリチュアルな伝統で語られてきた人間の内面的成長の可能性を、自由にそして互いに助け合いながら探求できる場を作ろうというビジョンであった。ネイティブアメリカンの虐殺、奴隷制、南北戦争、ベトナム戦争といったアメリカの暗い歴史にも関わらず、こうしたビジョンはワシントンやジェファーソンを始めとするアメリカ建国の父たち、リンカーンやフレデリック・ダグラスあるいはイロコイ族によって連綿と受け継がれてきた。しかし、そのビジョンの追求が今や危機に瀕している、とニードルマンは言うのである。

ニューエーじ運動を通して実現されてきた様々な価値観や実践法は、アジアやヨーロッパを初め、世界の様々な文化がアメリカという「坩堝」の中で溶け合うことで産み出されてきた。この坩堝を成り立たせてきたものこそ、ニードルマンが言う「アメリカというビジョン」である。あらゆる宗教的、哲学的ドグマや歴史的、政治的常套手段から自由になり、人間の可能性や真善美を追求しようとするこのビジョンは、地理的に限定された土地や政治的国家としてのアメリカだけではなく、人類に普遍的な価値としてその実現を望まれているものでもある。アメリカが現在国家としてこれほど強大な力を持つに至った背景には、そうした「アメリカというビジョン」を抜きには考えられない。しかし皮肉な事に、キリスト教原理主義の伸張するアメリカにおいて、今やそのビジョンの追求が抑圧されようとしている。こうした事態においては、この「アメリカというビジョン」の価値を世界中の人々が認識し、アメリカの外からその実現を働きかけることが必要になっている。すなわち、この300年間様々な文化が交流する歴史によって産み出されてきたニューエーじ運動の価値観は、今や世界の様々な文化と交流することで、その価値を吟味され、認識される必要がある。21世紀は、そうしたアメリカで生まれたニューエーじ運動と世界の固有文化の相互交流の時代であり、世界中で拡大する原理主義に対抗し、人類全体が共有できる普遍的なスピリチュアリティのあり方を実現していく時代になるであろう。

-
- ¹ ホリスティック教育研究会編 (1995年) 「ホリスティック教育入門」 柏樹社。
- ² David Spangler. (1989年) 「Emergence: The Rebirth of the Sacred 」
- ³ Wouter J. Hanegraaff. (1998年). 「New Age Religion and Western Culture: Esotericism in the Mirror of Secular Thought」 SUNY
- ⁴ 荒俣宏編 (1981年) 「世界神秘学事典」 平河出版社。
- ⁵ アンリ・エレンベルガー (1974年) 「無意識の発見」 弘文堂。
- ⁶ 紙数の関係で本稿はここでいったん筆を置き、次号において一九六〇年代の対抗文化、その後のニューエージ運動において人間性心理学が果たしてきた役割を中心に振り返りながら、二十一世紀に向けてニューエージ運動の流れから私たちが何を学ぶべきかを論じてみたい。
- ⁷ Anderson, W.T.. (1983) *Upstart Spring: Esalen and the American Awakening*. (邦訳『エスリンとアメリカの覚醒』伊藤博訳 誠信書房 1998年) 原文からの翻訳は筆者による。
- ⁸ 同上。
- ⁹ ハーバード大学の心理学史の専門家Eugene Taylor (2003) は、エサレン研究所で生まれたこうした新たな心理学をclinical psychology, experimental psychology と異なるexperiential psychology (体験的心理学)と位置づけている。
- ¹⁰ 拙論「アメリカにおけるニューエージ運動の源流とその特徴 (前半)」ホリスティック教育研究 第7号 2004年 p,47

参考文献

- Eisenberg, David M. and et.al. (1998) “Trends in Alternative Medicine Use in the United States, from 1990 to 1997: Results of a Follow-up National Survey.” *Journal of American Medical Association*. 280(18):1569-1575,
- Ferrer, Jorge. (2002) *Revisioning the Transpersonal Psychology*. New York: SUNY Press.
- Grossinger, Richard (1995) 「Planet Medicine」 North Atlantic Books..
- Johnson Don Hanlon (1995) 「Bone, Breath and Gesture」 North Atlantic Books. Needleman, Jacob. (2002). *The American Soul: Rediscovering the Wisdom of the Founders*. New York: Tarcher & Putman.
- Melton Gordon (1992) 「Perspectives on the New Age」 SUNY.
- Spangler, David. (1989) 「Emergence: The Rebirth of the Sacred」
- Taylor, Eugene. (2003) *Esalen, Considered within the Context of American Psychology: A view from the*

history of science. Unpublished manuscript.

York, Michael. (1995) *The Emerging Network: A Sociology of the New Age and Neo Pagan Movements*. Rowman & Littlefield.

Whorton, James C. (2002) 「Nature Cures : The History of Alternative Medicine in America」 Oxford University Press